

# 見学報告書

## 地域生活支援の複合拠点づくりに関する先行事例見学報告

令和8年3月3日

提出者 疋島和樹

羽咋郡市健康福祉・まちづくり関係各位 御中

(参考送付：地域包括ケア関係部署)

### 1. 報告の趣旨

本報告は、先行事例の見学内容を踏まえ、羽咋郡市における今後の高齢者の暮らしのあり方、住まいのあり方、在宅支援のあり方を考える材料として提出するものである。

特定の制度や施設類型の導入を直ちに求めるものではないが、羽咋郡市における将来の政策検討材料として、高齢化の進行、古い住宅ストック、生活利便性へのアクセス、介護人材不足といった課題を、住まい・見守り・相談・交流・役割づくりの視点から一体的に捉え直す必要があると考え、問題提起と検討の入口として整理した。

### 2. 羽咋郡市において将来に向けて明確化すべき課題

- 高齢化の進行により、要介護者だけでなく、要支援の方、まだ介護認定に至らないが生活上の不安を抱える方、独居不安を抱える方が今後さらに増えることが想定される。
- 既存の支援は、介護保険サービスにつながった後の対応に寄りやすく、デイサービスをまだ必要としない方や、デイサービスを利用したくない方が、自然に集い、相談し、地域で暮らし続けるための中間的な受け皿が乏しい。
- 羽咋郡市では、古い住宅ストックが多いことに加え、公共の場や商業へのアクセスが悪い地域もあり、高齢期における在宅継続が難しくなりやすい。自宅内部の導線の問題だけでなく、日常生活圏そのものの不便さが、生活継続の障壁になっている。
- 家族構成の変化、独居・高齢夫婦世帯の増加により、急変時対応、安否確認、買物・移動・服薬管理など、医療と介護の間にある日常支援の重要性が高まる。
- 羽咋郡市において現在不足しているのは、単なる介護施設ではなく、就労・交流・見守り・生活支援を含めて暮らし続けられる高齢者住宅の選択肢である。特に、就労の場、介護の場、生活の場、ふれあいの場が一体で成立している受け皿は、現時点で十分に整っていない。

### 3. 見学先の概要

見学先：だいにちスローライフビレッジ

所在地：新潟県上越市

運営主体：株式会社リボン

見学日：2026年2月22日

見学先は、サービス付き高齢者向け住宅を中心に、相談、交流、生活支援、就労、地域接点を複合的に持つ拠点として構成されていた。一定の年齢以上の高齢者にとって、介護の前段階から暮らし続けるための受け皿として参考になる先行事例であると感じた。

#### 4. 見学先で確認した主な内容

- コンビニ内の一角に介護相談機能が設けられており、日常生活の延長で相談できる導線がつけられていた。夜間にはスクリーンで区切られるものの、配置としては夜間も一定の安心感につながるものであり、場所や人の有効活用の観点からも参考になった。地域内企業のイメージ向上にも資する可能性があると感じた。
- 薬剤師会の事務所を実見し、看板でも確認した。医療・服薬相談との連携を想起させる配置であり、健康相談機能との接続を考えるうえで大きな示唆があった。
- 近隣の幼稚園や飲食店（大戸屋）での就業機会があると職員から説明を受けた。高齢者が単に支援を受ける側にとどまらず、地域の中で役割を持ち続けられる設計になっている点が印象的であった。
- ビリヤード、麻雀、ウォーキングマシン等、本人が選べる活動があり、これらのうちビリヤード台は入居者の元大工の方が作っていたとのことであった。単に設備が置かれているのではなく、入居者自身の技能や役割が生活環境づくりに活かされており、生活の継続を意識した環境であった。
- 車を持つ住人もおり、自立度を保ちながら暮らしている点が印象的だった。一方で、1日2回の安否確認、防犯カメラ、インターホン完備、24時間体制、救急搬送時の付き添い（説明では、オンコール職員が施設に来る運用）など、安心を支える仕組みも整っていた。
- 説明では、医療介護系の専門職ではないスタッフを8人で交代配置しているとのことであり、専門職だけに依存しない生活支援の体制づくりも参考になった。
- 敷地には将来的な拡張余地もあるように見受けられ、現在の一体運営に加え、今後の展開も見据えた構成であると感じた。

#### 5. 見学を通じて得た所感

今回の見学で強く感じたのは、見学先が「高齢者を集めて介護する場所」ではなく、「まだ元気が将来に不安のある高齢者も含めて、地域の中で暮らし続けるための受け皿」として成り立っていた点である。

要介護状態の方だけではなく、要支援の方、デイサービスをまだ必要としない方、あるいは「まだ高齢者扱いされたくない」と感じてデイサービス利用に抵抗感を持つ方にとっても、自然に関わる集いの場、今後の生活の場として機能していた。

また、見学先ではコミュニティーが形成されており、昔の集落のように住人同士が互いに協力し合い、それでも足りない部分を施設や行政が支えるという仕組みとして成り立っていた。この点は、単なるサービス提供ではなく、地域の中で暮らしを支え合う構造として大きな示唆があった。

羽咋郡市にも、同様に「自立しているが独居不安がある」「既存サービスにはつながりにくいが、見守りや交流の場は必要」という方は一定数存在すると考えられる。しかし現時点では、そのような方が無理なく移行・参加できる同種の受け皿は十分に整っていないと感じる。

#### 6. 羽咋郡市で検討する際の視点

- 本件は、制度重視ではなく、生活、すなわち生き方重視の視点で施策を構築すべきテーマである。高齢者施策を「介護サービスの提供」に限定せず、どのように暮らし続けるかという視点から組み直す必要がある。

- 高齢者施策には、生きがい、交流、得意分野を生かした簡易な就労機会まで含めて設計することが重要である。これは、本人の主体性の維持、孤立予防、生活機能の維持につながる。
- 健康相談機能、かかりつけ薬局、必要時のかかりつけ医との連携を相互に結びつけることで、介護の前段階からの支援導線を構築することが望ましい。
- 小規模多機能は有力な選択肢の一つではあるが、唯一の前提ではない。小規模多機能やサービス付き高齢者向け住宅に制度上こだわりすぎると、人件費を中心とした固定費が先に重くなる可能性がある。
- そのため、制度類型ありきではなく、高齢者向け賃貸住宅を複数戸集約し、見守り・相談・生活支援・交流を組み合わせた「村化」モデルも、十分に比較検討すべき選択肢である。
- 高齢化と古い住宅の問題を考えると、「介護サービスの追加」だけでは不十分であり、「住み替え先の選択肢」を地域内に用意する視点が重要である。
- 一般企業の誘致、とりわけ飲食チェーンやカフェなど、日常的に人が立ち寄る機能を接続しなければ、人の流れと利用動機が弱くなる。生活圏として成立させるには、交流や相談に自然につながる集客機能が必要である。
- 将来的な発展形としては、歯科医療や企業型の運動・健康増進機能（小規模ジム等）が加わることで、口腔機能、運動機能、生活習慣改善まで含めた、より総合的な地域生活支援拠点へ発展する可能性がある。

## 7. 防災・人材不足対策としての意義

このような拠点は、平時における見守り・相談・交流の場にとどまらず、災害時における安否確認、情報伝達、支援導線の確保といった防災面でも有効に機能し得る。

また、介護人材不足が進む中、すべてを専門職だけで支えるのではなく、生活支援、見守り、交流、地域参加の機能を再設計することで、専門職に過度に依存しない支援体制を補完する施策としても検討価値が高い。

## 8. 羽咋郡市としての視点

本件は羽咋市単独に限らず、羽咋郡市圏域における将来の地域づくりの視点からも検討に値する。人口減少が進む中で、生活支援機能をどのように地域内で再編・維持していくかは、より広域的な視点で議論されるべきテーマでもある。

## 9. 今後の検討課題として共有したいこと

羽咋郡市において今すぐ特定の施設整備を求めるものではないが、将来を見据えるならば、「高齢化」と「古い住宅」という二つの問題を切り離さず、住まい・見守り・相談・活動・地域参加を一体で考える枠組みづくりが必要である。

その中で、小規模多機能、サービス付き高齢者向け住宅、高齢者向け賃貸住宅の村化、民間店舗との複合化、健康相談とかかりつけ薬局・かかりつけ医の連携など、複数の選択肢を比較検討し、羽咋郡市に合う持続可能な形を探ることが重要である。

本報告が、健康福祉の観点だけでなく、まちづくりの観点も含めて、将来の政策検討のきっかけとなることを期待する。

## 10. まとめ

今回の見学先は、介護が必要になってから利用する施設というよりも、介護の手前の段階から、地域の中で暮らし続けるための受け皿として機能していた。

羽咋郡市においても、今後、高齢化の進行と古い住宅ストックの問題が重なる中で、既存サービスだけでは対応しにくい層が増えることが予想される。したがって、制度ありきではなく、生活・生き方重視の視点から、就労・交流まで含んだ高齢者住宅の選択肢を検討していく必要がある。

その第一歩として、本報告を、将来の地域政策・生活支援政策を考える材料として受け止めていただければ幸いである。

以上